男性育休に社会の"壁"

元裁判官の平野哲郎さん講演

宮崎市

「仕事と家庭を考えるフォーラム」（県、宮崎労働局など主催）が二日、宮崎市の宮崎観光ホテルで開かれた。男性裁判官として初めて育児休業を取得し、現在は五歳と二歳の子供を育てている平野哲郎さん＝一橋大法科大学院助教授＝が「パパはてんやわんや―元裁判官の子育て日記」と題して講演。事業所の人事担当者ら約百二十人が熱心に耳を傾けた。要旨を紹介する。

育児は母親がするものという前提で成り立っている社会で、男性が育児をしようとすると、さまざまなプレッシャーがある。育児休業取得にしても「二兎の席があると思うな」と言われれば、意欲もくじかれる。

私は仕事をしていた妻があった。が、周りに父子供も持ちたいと望まれた。私は仕事が忙しかったので、当初育児に不安ではーど思い、自分が育休を取ろうと考えた。

上司に相談した。すると一分間ほどの沈黙のあと、「難しい」と一言。上司は仕事熱心で、業務が早く終わっても職場でナイター中継を見るような人。男性の育休体験が書かれた本を渡し、何度も願いを伝えたが、取得すれば遠隔地に転勤させることも示唆された。

から「医学部で勉強した子の関係がうまくいっている実例があまりなく、

性別役割分担ネック

最初から責任を持って育児をしていれば父子の間によいきずなができるのいた。

ひらの・てつろう　1969年、埼玉県出身。東大法学部卒。裁判官として8年間働く間に育児休業を取得。2002年から現職。妻は医学部6回生で、第2子出産の際は〝育児休学〟した。京都市在住。

取りやすい職場環境を

手続きの中で「迷惑を掛け申し訳ない」という内容の上申書も書かされた。私自身も、職場に居残って感じる同僚との連帯意識や仕事の達成感を持ちながら働いてきた。

しかし、そのために自分や家族の時間がなくなる生き方は幸せではないと判断。結局、半年間、家で長男の世話をした。

専業主婦って気楽だろうと思っていた私の認識は変わった。授乳後に子供が噴水のように吐き、服などを洗濯して再度授乳してもまた吐くという繰り返しの日もある。それでも、子供から笑顔を向けられればエネルギーがわいてくるものだ。

法科大学院から教官就任の話が舞い込み、職場に居心地の悪さを感じていたこともあって、裁判官を辞めた。周囲からもったいないと言われたが、「子供の寝顔しか見ない」という生活の方が私にはもったいない。

男性の育児を妨げる一番の障害は性別役割分担意識だろう。「男は仕事に全力を注ぐべきだ」といった具合に。しかし、仕事だけに打ち込んだ結果、定年後はそれが百パーセントなくなり、「粗大ごみ」や「ぬれ落ち葉」になる危険性だってある。

育休を取ったことで査定を低くされたーなどの例を聞くこともある。男性の育休奨励策としては、不利益扱いの禁止、仕事から離れる不安への対策、家計全体の収入保障ーなどを挙げたい。

管理職研修で育休申請者への対応を教育し、さらに、職場から育休取得者を出したことに対する上司への評価があっていい。働きやすい職場にはいい人材が集まり、力を発揮してくれるはずだ。

今までの働き方は、特急を降りると再乗車できないため、走り続けるしかなかった。これからは育児や本人の病気で各駅停車になっても、一段落してその気があれば急行や特急に戻れる、そんな社会になってほしい。

宮崎日日2006年10月8日
＊宮崎日日提供